12 月 29 日　事務局長の当直日誌

お正月は田舎に帰りますので、申し訳なく思い 29 日の夜は派遣村に泊まりました。お泊まりは、私・伊原と、生活と健康を守る会の竹田さん、そして今は気ままな年金者暮らしの栢菅さんの 3 人です。石油ストーブ３台を周りに配置して暖をとったのですが、次第に寒くなり、テントにブルーシートを張って風と寒さをしのぎながらの当直となりました。２１時過ぎに女性１人を含む３人が訪れ、寝るところを探しているというのですが「ここは宿泊場所ではない」と伝え、明日来ていただくようにお願いしました。すると、一人の女性が「このおじいさんの調子が悪くて」と言うので、よく見ると咳をしていて顔色も悪いので放置できないと判断。急きょ仮眠室を提供することになり、宣伝カーに積んである毛布を引っ張り出して寝ていただいた。寒いがストーブはあるので、寒さは凌げると思ったが、様子を聞いてみた。３人は感謝して、テレビを見てくつろいでいました。聞くところによると、「たまたま３人で駅の地下に寝ていた。すると、お爺さんの調子が悪いので、どこかいいところはないかと探していると、テレビのテロップに派遣村が出ていて探してたどり着いた。」７０歳くらいのおじいさんに聞くと「気管支切開をしていて、病院にも通っている。年金暮らしだが同時に路上生活者でもある。僅かの年金でアパートは借りられない。少し財産もあって生活保護も無理。お酒が好きで、お金が掛かる」などの話を聞けた。６０歳くらいの女性は働き口がなく困っている、住まいもなくマックでコーヒーを１杯一晩かけて飲み、寒さをしのいでいた。住まいがないと生活保護は無理でしょう」と話した。３人目の青年は「就職を探して県外から来た。友達を頼っていたが、そこも出てネットカフェで寝泊まりしていたがお金が尽きた。来年になったら登録派遣で働こうと思っている」と話し、寒そうだった。

何もない当直と思っていたが、何があるか分からない。やれやれと思っていると、２２時過ぎに７０近いおばあさんが訪ねてきた。寝る所と食事をお願いしたいというが、これ以上は無理と判断して断ると、あっさり帰って行った。しかし、夜中の２時くらいに公園の見回りをしていると、そのおばあさんが寒さの厳しい中、一人公園のベンチに座っているではないか！「これは大変、死んでは困る」と早速、仮眠室のテントの案内し、先住民に断って入居が決定。４人目を仮眠室のテントに押し込んでしまった。このおばあさんからもお話を聞いたが、借金が路上生活の始まりで３年が経過。厳しい取り立てに通帳も印鑑も、年金手帳も取り上げられているという。怒りが湧いてくるが、これが実態だと感じた次第です。当直は厳しかったが勉強になった一晩でした。